



道路管理情報の図形処理

道路局 大森 敬

最近、手掛けている仕事に、道路管理情報の図形処理というのがある。電算機を使って図形の形状そのものを計算処理しようとするものである。特に道路管理に必要な道路認定の路線の形状、道路網等を座標読取機を介して地理的座標を丸ごと電算機の中に入力し、その後の各種の分析及び計算に使用するものである。従来の税金計算、給料計算等の電算機の利用方法と違い、機械が人間の要求水準に一步步近づいた感がある。産業の先進的な部門では既に使用されていたが、この図形処理技術が自治体の情報管理にまで使われる

時代がやってくるようである。道具としての電算機はこのような進歩をみているが、片やわが庁内の情報一般の管理状態を仕事に関連させて方々で拝見させてもらうと、残念ながら、各部門ごとに担当職員が奪闘しつつも、日々目前の業務に追われ、資料の混沌状態にあると思われる。

便利な機械を使っただけからといって直ちに、庁内の情報の流れが整然とするとは限らず、コストの問題、組織の対応等、さまざまな解決すべき問題があるが、早晚情報の無秩序状態を収集するため、建設土木部門には地理的要素をキイとして検索する図形処理法を使わざるを得ないように思われる。

かつて、明治、大正時代の埃だらけのポロポロの地図を整理していた時期から、電算による図形処理に至り、ようやくわが仕事も一段落し、新しい段階を迎えることができそうである。

公園の適正な配置を

緑政局 高橋一男

横浜市が管理し、供用している公園の数が昭和五十五年度中に大小あわせて一千カ所を越えた。その数だけ考えると、市民二千七百人に一公園となるが、総面積は約四六五haであって、市民一人当りの公園面積は一・六七㎡でしかない。

この数字は欧米諸都市は無論のこと、十大都市の中で最下位のものであり、本市の努力不足というより、高度経済成長期に横浜の人口が著しく増大したことがその最大の理由と思われる。

そこで、緑のマスタープランを作り、鋭意用地買収を進めながら公園の新設整備に努力しているが、全市のみると、地域的に偏在していることがわかる。児童公園については、開発行為が市域全体にわたって行われている関係で公園の偏在もそれほどではないが、近隣公園、地区公園クラスの公園に限ってみると、かなり顕著なものがある。

今後、公園を計画し整備するに当っては、近隣、地区公園クラスの偏在を是正する方向が必要であろうし、空地があるから公園にするという安易な考え方を排し、必要な場所に公園を計画し設置するよう努めなければならないと思う。

また、公園を整備し供用するまでには公園の規模にみあった時間が必要であるが、その間に、当然公園の将来にわたっての管理のあり方をも検討しておくべきであろう。その方向は、管理者の観点に立っての検討ではなく、利用者の眼で見、利用者の立場に立っての検討であること

「自治」とは何だろうか、ということについての一般論は誰にでも語れる。教科書に始まり専門書、雑誌の類も含めれば本は極めて無数ともいえる。しかし、具体的な実践を通しての生ま生ましく、自治体に働く者にとって参考に価するものは稀少である。人についても同様で、実践を踏えた、汗を流せる論者を捜し出すには一苦労である。今回の調査季報の特集である「都市の自治」の編集の中でも痛感した次第である。

例えていうと、大項目と小項目はあるのだが、両者を結ぶは

はもちろんである。

『調査季報』は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。都市科学研究室まで(電話六七一一二〇二九)。

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。七〇〇字以内。

ずの中項目が欠落してしまっていることに思い当ってしまふ。そこらあたりが正に問題なのだと思われる。

それにしても、わずか私の一〇年の観察でも、市民も自治体職員も意識さえ変遷し、「自治」は根づいてきていると思われる。「自治」は、何世代にも亘り息長く追い求める価値があるのだから、現実には悲観せず永い眼で求めていかなければならぬ。そして、単なる希望や幻想に終らせないため市民として、自治体職員として、何か一歩を踏みだすべきだと思う。

〈小熊〉